

山と森の精霊

高千穂・椎葉・米良の神楽

高見乾司ほか著

九州の背骨に位置する高千穂・椎葉・米良は、日本列島のなかでももともと山深い集落が点在する地域、そしてそこは神楽の宝庫。晩秋から初冬にかけて、あちこちの集落で笛の音が響き、華やかに着飾った神々が舞い、見守る村人たちからにぎやかな掛け声が飛ぶ。よそ者の私も、ふるまいの焼酎で暖をとり、村が

生きていることを実感する。登場する神は、山から訪れる精霊であったり神話に出てくる有名な神であったりするが、次から次へと人々の前に現れ祝福する。先祖の霊もやってくる。手力雄たぢからの神が天の岩戸を持ち上げる頃には、夜を徹して舞われた神楽の庭も明るくなっており、村は、新しい活力に満ち溢あふれる。

狩猟的な性格のつよい九州山地の神楽は、個性豊かな表情をした仮面を眺めているだけで飽きることがない。著者のひとり高見乾司は、神楽に用いられる数々の面は、アジアから九州に流入したものが中央に伝わり、ふたたび九州に逆流したのちに、原形を保って伝えられたのだと推測する。本書に並べられた数々の仮面を眺めていると、その長い長い旅が想おもわれる。(LIXIL出版、1800円)